

女性サーヴァントしか  
召喚できないマスター  
の話をするでしょう

れべるあっぷ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一身上の都合によりこの作品は打ち切りとさせていただきます。

こんな駄作ですがお気に入り登録してください。読者の皆様、ご迷惑をおかけしてたいへん申し訳ありませんでした。

尚、女性サーヴァントしか召喚できない系主人公の最新作

『先輩、ATMはカルデアにあります！』  
を絶賛投稿中でございます。

ダブルマスター体制ではありませんが、時系列やらに縛られないカルデア・マスター

と女性サーヴァント達との日常編になっておりますんで、

是非!!

是非に!!

是非ともご愛読の方よろしく願います。

<https://syosetu.org/novel/140570/>

# 目次

71

彼の話をするとしよう	1
彼のスケジュール管理の話をするとしよう	10
彼のグッドモーニングな話をするとしよう	21
彼は子供相手にムキになる話をするとしよう	32
彼の聖戦は確かに幕を閉じる話をするとしよう	43
彼のお仕置きについて話せるなら話をするとしよう	61
彼よりも我が王の話をするとしよう	

## 彼の話をするとしよう

うたかたの夢。

幾千もの星の数ほどありふれた夢。

この最果ての地で私は夢を見る。

日課であり趣味であり暇つぶしであり、これ以上にならない極楽。

これは人理を継続させるために奮闘するカルデアの、二人目のマスターのとある苦難に満ちたお話しである。

☆

「あああああああああつ!! ちくしよおおおおおつ!! 出ないっ!!  
まったく出ないっ!! 欲しい鯖が召喚に応じてくれないっ!! どうしてだ!! これ  
は最早一種の呪いか!! あれか!! 人理修復するためにもっと課金しろってか!! 貢

げってか!! でも残念ー!! 俺のカルデアには課金システムなんか搭載されておしませーん!! ダ・ヴィンチちゃんに課金システム作ってもらうしかありません!! 作ってくれないかなー課金システム!! 人類を救うためだ!! 全財産75万ほどしかないんだが全額課金してもいいんだぜ!! えっ?? 足りないっ?? 総人口約74億人もの命を救うのにお前の全財産などたかが知れてる?? まっ、是非も無いよねっ!!」

冒頭から見苦しいのだが……

彼はこの世の終わりかのように絶叫していた。周り見ず、羞恥など一切お構い無しに、成人したばかりのいい大人が無様にも喚いていた。

それはいつもの見苦しい光景であった。

「英之助先輩、召喚システムに八つ当たりしないでください。それとカルデアは貴方の所有物じゃありませんし、今召喚したばかりのサーヴァントに失礼極まりない態度です」

「そーですよ、英之助さん。デリカシーなさすぎ〜」

「フオウ………」

彼は共にサーヴァントの召喚を見守ってくれていた2人の少女と1匹キヤスバリレダの小動物に非難された。

「あ、あの、マスター……その……私じゃお役に立てないのですか……いえ、皆まで言わ

なくて結構です。その反応を見るからにどう見ても私じゃ役不足ですよ、ね……」

「あ、すみません。そういう意味じゃないんだ、ブリュンヒルデさん……もちろん、貴女様の力も必要ですともっ!!」

「さん付けはいいりません……マスター。ですが、もう、私に優しくしないでください……」

「オーマイガー………」

英之助さんサイテート、野次が彼にトドメを差した。

「ブリュンヒルデさん、この人の発言はあまり気になさらないでください。いちいち気にしていると面倒です」

「そーそー、この人、こんなだけどころいろいろ事情があるだけだから。マスターとしての実力はそこそこ頼りにできるし……それに貴女も可愛がってくれるよ、きつと」

「だといいいのですが……いえ、やっぱり困ります」

「フオウ……」

少女2人によるこの人呼ばわりだとか、ただ相槌しかうたないペットは置いといて、四つん這いになってがつくりとうな垂れ意気消沈している彼はぶつぶつとイジケていた。

「また女性サーヴァントかあ……どうして、いつもこうなんだろうなあ………笑えるほ





守護英霊召喚システム・フェイトを回すと必ずといっていいほど女性サーヴァントしか出ない。

それはもう1人の少女にも当てはまるのだが……

現在のカルデアは職員を除いて、彼らマスター達の召喚に応じ馳せ参上したのは女性サーヴァントしかいないというのが現状だ。(職員の8割も女性)

云わば、ここが桃源郷・カルデア。本来なら男性諸君には羨ましすぎるハーレム。ピバ・ハーレムっ!!

「マ、マスター、事情は大体把握しました。ですが、何がご不満なのですか?」

「うるせー!! 俺は知っているぞプリュンヒルデ!! お前もその内、俺を誰かに重ねて合わせて恋わずらい発症させるんだろ!!」

「そ、それは……いささか、自意識過剰じゃありませんか??」

「じゃあ俺の目を見て言ってくれ!! シャレになってねー!!」

初めは彼もうひよくハーレムサイコーと、欲望にまみれたブタみたいな男だった。

しかし、現実甘いように甘くなく、彼の理想郷は潰えて、いつしか男性サーヴァントを欲するようになっていた。(ホモではない)

そして、その理由が、彼が女性サーヴァントに敏感に反応する脅威が、ついにやってきた。

「「うふふ、ますたあ♥」」

「……………」

彼がサーヴァントを召喚するためにココにいることは、他のサーヴァント達も知っている。

またマスターがどこぞの女性サーヴァントを召喚することは彼女らにも知れ渡っている。

「あらあら、これはこれは……………またお綺麗な方をナンパ……………もとい、またお持ち帰りしてきたのですね。母は悲しいです……………とつかえひつかえ、誰彼問わず小娘に夢うつつを抜かす息子に育てた覚えはありません。およよ……………」

「……………」

彼は貴方の息子じゃありませんよー。

「マスター、男性サーヴァントを召喚するとおっしゃったじゃないですか、また嘘をつきましたね。これで何回目ですか……………うふふ、嘘をついたらどうなるか、約束しましたよねえ?」

「……………」

さて、どうなるんでしょうね……………。

「マスター。あんな女よりわたしのこと、いっぱいさわってください」

「……………」

いろいろアウトオオオオオ!!

主人公よりも欲望にまみれたな肉食系サーヴアント3人衆が素早く彼を包囲した。

「ま、まあ、待ちたまえ君たち、話せばわかる。冷静になれば、状況を見ろ、いつも言っているだろ? 暴力では何も生まれない。解決できないこともあるんだよ!! そうだろ

!!」

「うふふ、だからマスターのお部屋でお話するのではないですか」

「お話しするだけなら縄はいりませんよね頼光らいこうさん!? 新たな宝具開発でも試みるつもりなんですかそれは!」

「あらやだ、母にマスターの息子を開發させるだなんて、困った子ですわ……」

「いやいや、アンタどんな耳しとるんだ……っ!!?」

「それよりマスター、頭撫でてください」

「静謐せいひつちゃん、今それどころじゃないからね!!」

「ささっ、わたくし達の愛の巢に参りましょう。今日は寝かせませんからね♥」

「きよひー、その手に持つてるのは?」

「はい、ママシドリンクです♥」

「それはアカン……………」

「マスター撫でてください」

「た、たすけて、ブリュンヒルデもん!!」

「え、と、その……」

「新参者、わたくし達の邪魔をしないのであれば、マスターの取り扱いをレクチャーしてさしあげますわよ?」

「耳を貸すなブリュえもん! 俺の味方をしてくれたらお前の大好きな邪ンヌお姉様の寝室へ案内しよう!! そうだ、俺の権限で同室にしてもらえるよう邪ンヌお姉様に頼んであげてもが……っ!」

「撫でて、ほしいです……」

彼の口は奴等の手によって塞がれた。

「「御託はいいですからマイルームに行きましょう、マスター♥」」

「んんんんんんゆー……っ!」

人理の特異点を既に五つも修復した者の扱いとしては、なんともムゴい。

「流石サーヴァントとの絆レベル10なだけあるよねー」

「絆メーター振り切ってますけどね……」

「じゃ、マシユ、私達も部屋に戻ろっかー」

「はい、先輩♪」

「フオウ……………」

こうして今日も今日とて平和な？ カルデアの1日は過ぎ、夢から私も覚める頃合だ。

---

☆

さて、今日の話はここまで。

また明日、気が向いたら…いや、彼が生きていたら彼の話をするとしよう。

私が夢で見た、カルデアの二人目のマスター・逢道英之助あいまちあいのすけくんの女難に満ち溢れた物

語を、ね。

ただ、一言言わせて貰えれば、男性サーヴァントが召喚されても現状は変わらないだろうけども。

## 彼のスケジュール管理の話をするでしょう

朝7時ジャストに彼の部屋へ訪れるサーヴァントをご存知だろうか。

否、侵入してくるサーヴァントと表現した方がいいのだろう。たとえば、鍵を掛けていようがセキュリティを強化しようが、扉を宝具でぶち破ってくるサーヴァントを諸君らはご存知だろうか。

「不撓燃えたつ勝利の剣っ!!」

「なにごとサーヴァント?!?!」

マスターの部屋を破壊してでも侵入するサーヴァントはいくらでもいるが、毎日決まった時間に律儀に真面目に一秒の誤差なくやってくるのは彼女だけだ。

彼に理想の生活を強要する黒を基調としたメイド姿の少女。

彼の最初のサーヴァント。

モップで戦うメイドさん。

通称、メイド・オルタ。

「起きろ、ご主人様。朝だ、二度寝は許さん!」

「」

奇妙なことに我が王の別側面から現存する、アルトリア・ペンドラゴン・オルタの姿がそこにあった。

彼の女難はここから始まったのだろう。

☆

未来観測領域の消失。

人類史は2016年をもってして終了することが判明した。

これに対して人理継続保障機関カルデアは本来観測されるはずがない過去の特異点、2004年に聖杯戦争が行われた冬木に原因があることを突き止め、原因の解明に47名のマスター候補を現地に送り込みファースト・オーダーを発令した。

が——、事件が発生した。

カルデア内にて爆発事故、その場に集められていたマスター候補や職員が巻き込まれ死傷者を出す大惨事となった。

マスター候補47名の内46名が永久凍結を余儀される中、なんとも皮肉なことに、生き残ったのは一般人採用で召集された藤丸立夏という少女だ。そんな彼女とカルデアにいたサーヴァントと融合を果たし生き延びたマシユやレイシフトに巻き込まれた所長のオルガマリーと共に、カルデアからドクター・ロマンのバックアップの下に冬木の町の調査をすることになった。

途中で聖杯戦争の唯一の生き残りである光の御子、クー・フリーンと共闘関係を結び迫り来る脅威を排除していった。

人類の命運をかけたそういう物語。

でも、違った。

まだ、彼が登場していない。

そう、まだ彼の物語は始まっていなかった。

「ほう、面白いサーヴァントがいるな」

「先輩、目標サーヴァントを確認。ラストバトルです。戦闘開始します……っ!!」  
彼の物語はここから始まる。

舞台はいきなりクライマックス。特異点の原因であり、洞窟内で大聖杯を守っている敵サーヴァントと対峙した。聖杯によって泥に染め上げられた我が王<sup>セイバー・オルタ</sup>とマシユが宝具を展開する。



「約束された勝利の剣」  
エクスカリバー・モルガーン  
 ロード・カルデアス

「っ!!」

「人理の礎っ!!」

お互いの宝具が激突した。

暴力的な魔力の塊がマシユを襲いかかり、対してデミ・サーヴァントであるマシユは融合したサーヴァントの真名もわからない状況下で仮想宝具の疑似展開で対抗してみた。

だから、彼はそこを狙った。

今から思えばこれも彼の計算の内だったかもしれない。

洞窟内に響き渡り唸り狂うエンジン音。暗闇に紛れていた漆黒のマシンの姿を現した。大型二輪のバイクに跨っているのは見たことのある顔のメイドと、見たことのやるような、どこにでもいてそうな面をしているが、不適に笑う青年。それはまるで招かざる客がおこがましくも現場に押しかけたように、誰もが彼らの登場を予期してなどしておらず――、

「「「え、誰―――っ!?」」」

ヒーローは遅れて登場した。そして、メイド長は狙撃銃を構えた。

「令呪を持って命ずる。宝具の解放だ、メイド・オルタ……っ!!」

「承知した、ご主人様―――洞窟内を駆けるは不撓ふとうの魔弾。ロック!

セクエンス・モルガイン  
不撓燃えたつ勝利の剣——っ!!」

まさか、藤丸立夏以外のマスター候補がここへレイシフトいたとは誰も予想がつか  
なかつただろう。

まさか、あの地獄を自力で生き延びサーヴァントを召喚していだだなんて想像もつ  
なかつただろう。

まさか、敵も宝具ぶっぱしている横腹を同じ顔のサーヴァントに狙われるとは思  
もみなかつただろう。

「ぐう、私の顔真似したライダー風情が……つけ上がるな……っ!!」

クラス補正もあってセイバー・オルタはかなりのダメージを受けるもしぶとく生き  
ていた。

そして、ターゲットをマシユからメイド・オルタ及び彼に変更し、また宝具を解  
き放つために漆黒に染まる聖剣を天に掲げた。

先ほどよりもさらに膨大な魔力を収束していく。

「私たちの時は本気じゃなかつた……っ?!」

「駄目、避けて——っ!!」

「いや、俺たちの勝ちだ!!」

セイバー・オルタの宝具が発動するよりも先に2人は動いていた。

宝具を放つのではなく、宝具で敵に突っ込んでいった。セイバー・オルタはそれを受け止め——「たまたらず、しがみつくとしかできなかった。」

「ぐう……まだわからないのか、これでは私を倒せないと……」

「わかってないのはお前の方だよ。俺たちの勝ち揺らぎはしない。そうだろ、キャスター……っ!!」

「あー坊主、そういうことかよっ!!」

洞窟前で敵サーヴァント・アーチャーと殺り合っていたクー・フーリンが駆けつけて、宝具を発動させた。

「灼き尽くす炎の檻——ツ!!」

セイバー・オルタの背後に展開された、巨大な人型木人形の胸元にある扉を開き、そこにフルスロットルで突っ込んでセイバー・オルタを押し込んだ。

「……お前らも入るのかーい!!」「……」

勢い余って彼ら3人仲良くマシンごとウィツカーマンの中へダイブしていった。

思わずツツコミを入れてしまうぐらい衝撃的な光景だったに違いない。キャスターもキャラ崩壊待ったなしレベルだ。

「アイツ、バカなの!?!」

「バカがいる! 本物のバカがいる!?!」

『彼の身元が判明したよ。マスター候補の1人、一般人枠の逢道英之助あいまちあいのすけくんだ。たぶんバカだけどね』

「先輩も所長も、ドクターも彼らの心配してください!! でも、あの人たちきつとバカです!!」

バカだバカがおるぞ、と2人に悪態をつくカルデアメンバー諸君。

「あー、嬢ちゃんたち。その馬鹿共が、いや、坊主はメイドに担がれて無事脱出したみたいだぜ。馬鹿だけどな」

なにはともあれ、彼らはウィツカーマンの中で敵とやり過ぎし、上手く自分達だけ脱出することに成功したようだ。

『所長、敵サーヴァントの消失確認しましたっ』

「本当に倒したって言うのっ!?! うそ、信じられない、あんなのがっ!?!」

敵の黒い方の我が王も不憫でしょうがないけども。

彼女はウィツカーマンの中から脱出することができず炎の檻の中に囚われ焼却された。

トドメを差したのはクー・フリーンではあるが、敵サーヴァントを追い詰め追い込んだのは、その一役を担ったのは間違いない彼ら。あんなの呼ばわりの彼らだ。

「ふっ、君達、怪我はないかい?」

「……………」

格好つけたい年頃なのだろう。20歳だが。

彼は遅れてきたヒーローを演じ、爽やかな笑みを見せ、カルデアメンバーに声を掛けた。米俵を担ぐようにメイドに担がれる彼は後ろを向いていたけども。

格好つけようとして初めて羞恥を知り、人は強くなっていくとも言うだろう。

「こ、これにて一件落着っ」

「清掃完了。メイド稼業も悪くはないが、オチもないがな」

「フオウ……………」

やれやれ、とキヤスパリーグが皆を代弁していたことが、またシユールだったけどね。

こうして彼の物語は始まっていく。

まるで、これを序章にして、邂逅にしていくように……星の導き手に導かれ、彼らの運命が今決まった。

ただ、まだこの時までには後に起こる悲劇を誰も彼も知る由もなかった。

「では、本日のスケジュールを伝える」

「回想も終わり、あれから幾ばかりか日も経ち、彼女との絆も深まりし、深まり過ぎた彼の朝は今日もやってくる。」

「午前7時15分に朝食」

「おけ」

「午前8時から朝の稽古」

「うん」

「午前9時からブリーフィング」

「うん」

「午前9時半から正午までレイシフトにて種火周回」

「うん……」

「正午0時に昼休憩。昼食を取れ」

「おけ」

「午後1時から周回の続き」

「うん……」

「午後4時から騎乗稽古」

「うん……」

「午後5時からブリーフィング」

「うん」

「午後6時からフリータイム」

「おけ」

「午後7時から夕食」

「おけ」

「午後8時から入浴」

「あ、うん……」

「午後9時には就寝……」

「俺は多忙な小学生かつ!!」

多忙だが、午後9時就寝というのがミソだ。

「おっと失礼。午後9時からダ・ヴィンチちゃんの座学コーナー」

「うんこ。もう一度言うがアレはうんこ……」

「午後10時から夜の騎乗稽古。今夜は私の番だったな、ふふっ……」

「やだ……」

「午後12時、就寝」

「つ、辛すぎるぜ、カルデア」

徹底的なスケジュール管理。メイド長による逢道英之介掌握術。理想の生活は、実現されつつあった。

「それではご主人様、本日も理想のために強く生きましょう」

「彼は、もう何も言うまい。」



## 彼のグッドモーニングな話をするでしょう

彼は背伸びをした。

瞼をこすり、欠伸をして背伸びをした。目覚まし時計の如く、メイド・オルタの来訪で幾分かは目覚めも悪いが、まだ眠たそうだ。

朝食のために食堂へ向かう。

その足取りはおぼつかず、ただ単純に先のダメージが響いているだけなのかもしれないが、やはり今日までの疲れが溜まっているだけなのだろう。

ここは桃源郷・カルデア。

人理焼却を防ぐために、一般人でしかない青年少女に全てを託し、命を掛けた戦いを繰り広げる人類最後の特務機関。

しかし、青年の疲労はそれだけじゃなかった。

彼にとって人類史を救うことより、サーヴァント達と円滑なコミュニケーションを計る方が超高難易度ミッションじゃないだろうか、という現状問題。

魔境の地・カルデアとも言うがな。

世知辛い環境下になったな、と彼はため息をついた。

ぼんやりと外を見れば猛吹雪の悪天候。心も沈むつてものだ。

「ふわあゝい、英之介さんおはよー」

「ああ、おはようさん。立夏……。」

彼にとつての救いはカルデアにはたくさん良識のある人たちがいること。たくさん癒しがまだ残されていること。慰めてくれる人がいるということだ。

変なのは彼と彼の周りだけ。

同じマスターである藤丸立夏は至つて普通。男のサーヴァントはいらない！ 美少女だけでいいのよ！ と宣言するぐらいのジョークを言える女の子だということ。

うん、普通だと思う。

「あれ？ マシユは?！」

「起きた時にはもういなくなつたかなー。なんか、今日の朝早いからつて言つてたのは聞いてたんですけどー」

「そうかいそうかい、それで立夏はパジャマ姿のまんまなんだな」

このスットコドッコイ、と彼は笑ふことにした。

「あ、もしかして、私のパジャマ姿に欲情してくれたり?」

「ふっ、お嬢ちゃん。ボタンが一個ずつズレてるぜ」

「きゃっ。やだ、エッチ、スケベ、頼光さんにチクつちやうぞ♥」

「……………」

「まーそんなことよりも。英之介さん、随分のんびりしてますねー……早く行かないと!! 朝ごはん!!」

「こらこら、手を引つ張るもんじゃないよ、君。落ち着きたまえ。朝ごはんは逃げないさ」

「何を言ってるんですか、このスットコドッコイ!!」

「俺がス、スットコドッコイ……」

きょうび  
今日日、スットコドッコイなど聞かないが。

「腹ペコ王達に朝ご飯全部食べられてもいいって言うんですか!!」

「それは困る!!」

「なら早く行きましょう!! ほら駆け足!!」

「だが断る!!」

「なんでさ!!?」

「小使行つてくる!!」

「サイテー!!」

「俺の席も取つといて、よろしくー!!」

「ふざけんなー!! だけど、そんなところも素敵だと思えますよ!! たぶん!!」

「ぐふふつ、今度はどんな悪戯で英之介さんを困らせてやろつかなく♪」  
そんな声も聞こえた気がする。

☆

部屋を出る前に何故用を足さなかったと彼らは言う。

「あ、子イヌだ、おはよー……って逆走してどうすんのよ。食堂行くんでしょ？ あつちよ」

「おはよーだ、エリちゃん。だが、食堂にはまだ行かない！ あばよ〜!!」  
「なんでよ!?!」

タツタツタツタツタ……。

カルデアには職員用のトイレもあるが、現在位置からは彼の自室の方が近かった。ので、すれ違う者たちに逆走していると解釈されてもおかしくなかった。

「あ、マスターだ。おはー」

「英之介さん、おはよー」

タツタツタツタツタツ……。

健康的な褐色ロリ……もとい、彼が召喚したサーヴァントと、それに対をなす、オリジナルの少女サーヴァントとすれ違った。

「クロエにイリヤちゃん、おはー」

「あれ、どこ行くのー?」

「食堂はあつちですよー??」

「うふふ、お花摘んでくるのよー」

「あ、うん、あつそ……」

彼のオネエジョークは少女たちに不評だった。最近の小学生はドライであった。ちなみに、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンは少女・立夏の召喚に応じたサーヴァントである。

「ああん、お姉様あく、私を置いていかないでくださいまし……っ!!」

「ええい、くつついてんじやないわよ、まったく……」

タツタツタツタツ……。

そして、また別のサーヴァントとすれ違った。

「よつ、邪ンヌにブリユえもん。今日も仲がいいな、おはよーさん」

「あ、ちよつとアンタいい所につて……誰のせいだと思つてんのよ!! つてちゃんとアタシの話聞きなさいー!! 食堂はあつちよー!!」

「ああああああシグルドお姉様ああああああああ!!」

「アタシはシグルドじゃないつてんでしょうが!! シグルドはあの馬鹿よ!!」  
タツタツタツタツタ……。

去つていく彼の背中に向けて指を差す。

「え、それは本当なのですかお姉様っ!?!」

「え、ええ、本当よ……アタシが嘘をつくはずがありません」

顔を逸らし、しかし、嘘を真実にしてしまえばいいのよと黒い方のジャンヌ・ダルクは自分に言い聞かせるのであった。

「あら、マスター?」

タツタツタツタツタ……。

「ら、頼光さん、おはようございますです」

タツタツタツタツタ……ダダダダダダダダダダダダ……ガシツ!?

「はい、おはようございます。今日も朝からお元気がいいのですね」

彼は腕を掴まれた。

「ですけど、廊下を全速力で走っては危ないですよ。転んでお怪我をなされたらどうなされるんですか?」

「いやいや、ちよつと過保護過ぎやしません? ガキじゃあるまいし、そんなもん、俺ぐらいのレベルになれば受け身ぐらいとれますよ」

「うふふ、それでも母はマスターのことが本当の我が子のように心配なのですよ」

「あ、うん、ども……」

なかなかのレアだ。素でテレる彼は珍しい。

しかし、彼は気になったことがあった。何故、この母は手を離してくれないのだろうか、と。

「あー、まーあれです頼光さん。諸事情につき急いでたんですよ」

「あらあら、今は朝食を摂るお時間ですものね。しかし、マスターは血相を変えるほど急いでいた。さては、何か忘れ物を取りに自室へ向かうつもりだったんですか?」

「そ、そう! それ!! 頼光さんは俺のこと何でも知ってるね!!」

「うふふつ、嫌ですわマスター。母として当然じゃないですか」

「と、当然なんだ……」

母の腕力に勝てない。ずりずりと引き寄せられる。

「母は息子のことなら何でも知っているものです。世界万国共通概念ですよ、マスター」

「ら、頼光さんがおっしゃるならその通りなんでしょうね」

「ですから、マスターが嘘をついているのも直ぐに見抜けるというものですよ。本当はお手洗いに行かれるのですね」

「……………」

彼のことは何でも知っているというか、もはやエスパーだ。

「ささ、マスターのお部屋に戻るよりもわたくしのお部屋をお貸しします。どうぞ、中へ」

呼び止められた場所は頼光の部屋前だったということ。それだけは不味い。

「どうなされました？ さあ、早く……早く用を足して食堂へ向かいましょう。母が見てあげますから」

もうそれは罰ゲームなのでは？

「今さら何も恥ずかしがることはないというのに。おおよ、母は言う事を聞いてくれない息子をどう説得すればいいというのでしょうか」

「いやいや、いろいろ誤解はあると思うんだけど、頼光さんの好意も嬉しいんだけど、俺の部屋に戻る用事があるってのも今思い出したんだって。そう、あれだ、スマホ。スマホ持って来るの忘れちゃって……えと、立夏の奴が寝ぼけてパジャマ姿で食堂行ったん



だよ。それを写メってからかってやろうと思つてさ。で、ついでにトイレも رفتときたいなーって」

「あらあら、そういうことだったのですか。てつきり、母の寝室には入れるか馬鹿野郎とグレたのかと思つて……およよ」

「そ、そんなじゃないって!! それに頼光さんには重要なミッションをお願いしようと思つてさ。立夏には席取つといてつて言つたけど、本当に取つといてくれるか分からないから信頼できる（戦闘に限る）頼光さんにお願ひしようかと……」

「うふふつ、それならそうと早く言つてくださればいいのに。わたくしめを頼りにしてくださるなんて、もう嬉しゅうございますう♪」

「(っ)は……っ!?!」

思いつきり抱きしめられた。ダメージを負うほどの母<sup>パーサーカー</sup>の愛が彼を包み込んだ。

☆

さて、マイルーム前。

「ゼーゼー、やっと辿りついた……」

あの後、自室までのコースを変更した。なにやら不穏な気配（きよひー）をいち早く察知した彼は遠回りをして自室へ戻ってくるのであった。

しかし、

「なんだこりやつ!？」

「むっ、その声はご主人様か？」

驚くのも無理なかれ、破壊された今は亡きドアがあった入り口には清掃中の看板が立っている。

どこぞの清掃業者の陰謀論でも渦巻いているかの如く、現在自室はダ・ヴィンチちゃん印の洗浄マシーンが床を水浸しにしているのであった。それをメイド長がモツプで拭き取っているという具合に……

「貴様、何をしている?」

「そのままそっくり返させてもらうぜ。貴様こそ何をしている?」

「見ての通り清掃中だ。ドアが大破してしまったからな」

「お前が壊したんだよバーロ!!」

何も悪びれることのないメイド長。

ドアを破壊しただけで水浸しにしてまで清掃することなかっただろうに。ついに彼も我慢の限界だった。が、メイド長が逆ギレした。

「おい、貴様っ!! 清掃中に土足で入ってくるなっ!!」

「いやっ、ここ俺の部屋!! 便所行くだけだっ!!」

「それも駄目だ!! 共同トイレへ行けっ!! 汚れに汚れきっている貴様のトイレを『ダ・ヴィンチちゃん印・便所掃除もコレ一本で楽々☆クリーンバスター』でもっばら浄化中だ!!」

「なんでお前がキレてんだよ!? つーか、なんかトイレのドアがガタガタいって泡漏れてんですけど!?! おいおい本当に大丈夫なんだろうなっ!?!」

「ふっ、案ずるな。貴様が朝の稽古を終えた時にはキレイさっぱり真っ白になってるだろう」キリッ

「それってトイレが吹き飛ぶとかそういうオチじゃないだろうなっ!?!」

「そんなことより朝食をさっさと取って来い。このストコドツコイめが!!」

「……………」

チクショー、と彼は現実逃避してその場を去るのであった。

頑張れ、英之介くん。

# 彼は子供相手にムキになる話をするとしよう

この世の中には大人気ない大人なんてどこにでもいるものだ。

たとえば子供の悪戯を笑って許せない大人がいたりする。たかがカンチョー如きにマジギレする大人がいたりする。

というか、このカルデアにもいた。

そう、すなわち彼だ。

「いや、俺だつてわかっているんだぜ。たかがガキんちよ共の悪戯だつてことはよお。マジにキレルほどでもないってことはわかっているんだ。普通の挨拶じゃ飽きたんだろ。うよ、たまには違う挨拶をして刺激が欲しかったんだと思うんだ。俺がどんな反応するか見てみたかっただけなんだ。俺がどんな挨拶を返してくれるか期待していただけだと思つたんだろ？ そうなんだろ？ ああ、分かっているさ。そんなこと分かっていると。お前たちはどこまでも純粋でどこまでも無邪気で、たとえ俺のサーヴァントじゃなくても可愛い奴らなんだ。俺もホント大人げないとは思うわー。俺も笑つてお前らと挨拶交わしたかったわー……でもなあ、カンチョーだけは話は別なんだよ!!」

「[「……………」」]

指で印を結び、忍法・カンチョーの術の構えをしてぶつぶつ言っているのは、人類史を救う者の姿には到底見えなかった。

まず、何故こんなことになっているか、説明は必要だろうか。

早い話、彼が用を足して食堂へ向かう途中にとある子供サーヴァント3人組出くわし、挨拶にカンチョーされて激オコなわけである。

まあ、子供だろうとサーヴァントである彼らにカンチョーされるのは危険も伴うだろう。だけど、彼が腹を立てているのは相手がサーヴァントだからではなく、子供にやられたから怒っているのだ。

だから、大人気ないという話。

もう一度言うが、これから世界を救う英雄になる男には到底見えなかった。

「お前らさ、カンチョーの恐ろしさナメてるだろ?」

「そ、そんなことないよ?」

相手がかの有名な切り裂きジャックであろうと容赦しないだろう。

「お前らはさ、カンチョーされた奴の気持ちを考えてことないだろ?」

「お、お兄さん、おめめのハイライトが無くなってきたの……っ!」

相手が童話の少女だとしても手加減しないだろう。

「お前らは一体全体、俺をまたあの暗黒時代に戻すつもりかよ。俺はこれからお前らに

ウンコたれと指差さされて人理修復していくんだろぅな!!」

「なんの話ですか!? ちよつと落ち着いてください!!」

相手が聖女様の黒くてちっこい女の子であろうと泣くまでお仕置きするだろう。

「トナカイ2号さん、わかりました! 私たちが間違っていました! 論理的にいつて、ごめんなさい!」

「ご、ごめんなさい!」

「もう謝つても許さん! ケツをこつちに向けてパンツを脱げえい!! 俺様のゴツドフィンガーの餌食にしちやる!!」

「ふえ!? それはロジカル……もといセクハラですよ!!」

「セクハラ? それは違うな、オルタちゃん。これは教育だ。君達が挨拶をして、俺もその挨拶に応える。君達は社会をちゃんと勉強しなくちゃならない。じやないとロクな大人になれないからな」

「でも大人気ないお兄ちゃんはロクでもない大人のような……」

「シヤラップ!! ジャックちゃんも言うようになったねえ。でもな、ちゃんと挨拶をしたら相手の挨拶も受け止めなくちゃならない。その基本もできない大人だけはなつたら駄目だよ!!」

「であればパンツまで脱がなくても……っ!!」

「じゃあパンツ越しからだっただけいいんだな？」

「あつ……今のは違うんですっ／＼／＼」

「はい論破!! もう弁解の余地もありませーん!! ほらっ、さっさとお尻こつち向けて突き出す!! オルタちゃん、早くうー!!」

「ふええ……／＼／＼」

なんだか楽しそうだね、彼。

なにはともあれ、世界を救う前にいろんな意味で彼を救ってあげた方がいいと思うけどね。でも、私の心配には及ばなかった。

童話の少女が決死の覚悟で持っていた分厚い本を、この人類悪へ叩きつけた。

「ぐげーっ……おい、普通に痛いんですけど!?!」

「皆、今の内に逃げるの!!」

「うん、わかった!! オルタちゃん、早く行こっ!!」

「は、はい……っ!!」

「おい待てガキども!!」

ジャック・ザ・リッパーに手を握られたオルタ・リリイ。

子供たちは二手に分かれてこの場から去っていった。

1人、ポツンと取り残された彼は惨めな気持ちになった。自業自得はいえ、あまりに





さて、聖戦の幕開けである。

まず、彼が向かったのは何故かロマニ・アーキマンの部屋だった。現在のカルデア内医療トップにして、もつとも権力のある三十路間近の独身男の部屋へ訪れた。ヒトは皆彼のことをドクター・ロマンと呼ぶ。

「やあ、おはよう英之介くん。朝から僕の部屋に遊びにくるなんて珍しいね」

「そうでもないさ。ロマンの部屋の前にこんなもんが落ちていたんでな」

「おや？ 彼女のしおりだね、それ」

それは読書の時に使われている本の葉だった。

童話の少女ナーサリー・ライムがよく愛用しているものだと一目見てわかるものだった。それを落とすなんて無我夢中で逃げ場所を探していたのだろう。

彼はドクター・ロマンにことの成り行きを説明した。

「俺も大人気なかったとは思う。だから、俺が怒っていたワケを説明してガキンちよ共に分かってもらいたいんだ」

「なるほどね。君の気持ち、ボクにもわかるよ。ボクもそっち側の人間だったからね。引越するまで、そりゃ汚名を被った暗黒時代だったものさ」

「おお、俺の気持ちもわかってくれるのか。流石はロマンだな」

「というか、サーヴァントにカンチョーされてお尻は、その、痛まないのかい?」

「ふつ、俺はあの暗黒時代があつたからな、二度とウンコを洩らしてたまるか根性でケツ筋鍛えてたからな……それなりに平気だぜ」

「そ、そうなんだ……」

「それじゃあ、ナーサリーを出してくれ」

「え、いやいや、それはできない。ナーサリーはここにはいないからね」

「ふむ……」

考える素振りをするや否や、彼は素早く行動に移した。

ただ、当てが外れたか、彼は遠慮なく非常識にもクローゼットを開いてみたが、童話の少女の姿はなかった。マジ☆マリのグッズで散乱しているだけだった。

他にもトイレ、ベッドの下、デスクの下、漁れるところは全部漁った。

「ボ、ボクのこと、ちよつとは信用してくれてもいいんじゃないかな……」

「信頼はしてるさ。だけど、ロマンがちよつと席外した隙をみて侵入してる場合もあるだろ? ロマンは何も知らなかった……ってな」

「そ、そうだね……」

「あーここだと思っただけだな。他あたってみるわー」

「あ、その葉は……??」

「人質は必要だろ??」

「……………」

童話の少女は葉を返してほしければ、必然的に彼の前にもう一度顔を出さなければならなくなった。これで1人目を抑えたのも同然である。

で、デスクに置かれたドクター・ロマンのイチオシのお菓子を1つ、2つ、ひよいと手に取り、その場を後にするのであった。

「あつ、ボクのお菓子……………」

「……………」

無常にもドアの閉まる音だけがした。

☆

さて、残り2人はどこへやら。

この広いカルデア内で始まった鬼ごっこ、又は、かくれんぼ。それは果てしなく壮大で大変だ。だけど、案外すぐに決着するだろうと彼は読んでいた。

何故なら、彼は一人で子供達の相手をする気など、さらさらなかつたからだ。

「静謐ちゃん。俺の可愛い静謐ちゃんはどこー?」

「マスター、お呼びですか?」

ぬつ、と背後から姿を現したのは彼のサーヴァントのアサシン。隠密行動に長けたサーヴァント。

日頃から暗躍しているだろうから、彼がこれまで数々の特異点を生き延びてきたのも彼女の活躍は大きいわけだが。時たまバーサーカーの狂気に当てられて手を焼くこともあるのだが、それはまあ置いといて。

彼は勝負に勝つためなら手段を選ばない。

彼は彼一人で子供たちを捜していると見せかけてでも、この勝負に勝つつもりでいた。いや、もうなんの勝負かわからないのだけだ。

「静謐ちゃん、ロマンの部屋にナーサリーちゃんいなかったね」

「それは……」

彼をがっかりさせてしまったと思い、しよんぼりする静謐のハサン。

彼は落ち込む彼女の頭を撫でてあげた。

「あ、いや、別に責めてるわけじゃないんだぜ？ 静謐せいひつちゃんの言ったとおり、確かにナーサリーちゃんはロマンの部屋の中へ入っていった。ロマンの奴、葉を見ただけでナーサリーちゃんのだと決めつけやがったのもアレだな。じゃあ、彼女はどこへ隠れたのでしょうか、って話だ」

彼はちんまい女の子が隠れられそうな所はくまなく探したはずだった。

「であれば、霊体になって隠れた可能性がありません」

「もしくは、彼女自身が本になった可能性もあるぜ」

「マスターは机の下じゃなく、引き出しの中を探すべきでした」

「まあ、いいさ」

彼がその答えに辿りついた時にはドクター・ロマンの部屋を出た時だった。もう一度、中に入って本棚や、デスクの引き出しを片っ端から探すこともできただろう。

しかし、彼はそれはしなかった。

リスクが高かったからという理由もある。あまり追い込み過ぎると返り討ちをくらう可能性もあった。

その場合、彼はひとたまりもない。

だから、彼女には一時の安心とまだ彼が彼女を狙っているという緊張感を与えるだけに留めた。それだけで良かった。

もうすでに勝利の方程式も彼の頭の中で完成されていた。

子供3人相手だろうと全力を持って狩るのみだ。負ける要素は一切無し。

「静謐せいひつちゃん、次はジャックちゃんだ」

「はい、マスター」

さあ、大人気ない彼の物語はまだ終われない。

とにかく逃げて、ジャック・ザ・リツパー。

## 彼の聖戦は確かに幕を閉じる話をするとしよう

仕込みは万端。

勝利の方程式は確約された。

彼のカンチョーに対する並みならぬ執念により、大人気なく、容赦なく、徹底的に子供たちを追い詰めていく。

彼が次に訪れたのは工房だった。

「やあ、ダ・ヴィンチちゃん工房へようこそ」

ここは、天才を自称するサーヴァントの有する工房だ。

「おはようだ、ダ・ヴィンチちゃん。いきなり本題だが、ここにジャックちゃん来てない？」

「ん？ 突然藪から棒に人探しかい？ ジャックちゃんがどうかしたのかい？」

「ああ、聞いておくれよ、ダ・ヴィンチちゃん」

彼はドクター・ロマンにしたように事の経緯を説明した。

「ふむふむ、それは大変だったね英之介くん。カンチョーだけは確かにムゴい」

「おお、ダ・ヴィンチちゃんも俺の気持ちわかってくれるのか！ お前、ひよつとして俺

やロマンと同じコツチ側の人間だったか!!」

「否、私は君達と相対するアツチ側の人間だったね」

つまり、カンチョーをするイジメっ子側の人間。

「そんなバカな……お前、俺の気持ちわかってくれたじゃん!!」

「だから、幼い頃は同じ年の男の子を片っ端からカンチョーしていつて全員ウンコたれの称号をくれてやったのさ」

「お前はとんだ悪ガキだったんだな!？」

「ふふつ、まあ悪ガキだったからこそ、それ相応の報いを受けたのさ。もう二度としません、ごめんなさい、お母さん。だ」

「……………」

だから、君の気持ちがよくわかる、と天才は言う。

だからこそ、君はカンチョーに執着しているとも言おう。

「カンチョーをやった者は罰せられる。今ここで子供たちを止めなければ、手に負えないそれ相応の手痛い報いを受けるだろう。だから、君はそうなる前に、子供たちをちゃんと叱って許してやるべきだ」

「うんうん、そうだよな。やつぱりちゃんと怒ってやらないと駄目だよな」

「限度つてもものもあるけどね。ほどほどに、ね。それでちゃんと仲直りして朝ごはん食



べておいで」

「おうき。やつぱり、ここに来てよかったぜ。ダ・ヴィンチちゃん。サンキューな」

「そう言ってもらえるとダ・ヴィンチちゃん冥利に尽きるよ」

こうして彼は工房を後にしようとして、出て行こうとして、ドアの前で立ち止まった。そして、振り返った。

まるで、何かを思い出したかのように。

まるで、何かを見つけてしまったかのように。

「う、うん？　なんだい？　用は済んだよね？　まだ何かあるのかい？　ジャ、ジャックちゃんは、ここにはいないって……限なく探してみるかい??」

「……………」

その件については彼は追及しないようだ。

もう、その仕込みはここでも終えた。今のやり取りをした時点で仕込みは終えた。

そんなことよりもだ。

「なあ、ダ・ヴィンチちゃん。これはなんだ?」

「そ、それは……………」

彼が工房を立ち去らなかつた理由。

彼が手に取ったモノが彼の足を止めたのだ。

「な、なんだろうねー、ソレ……」

「お前が開発したお掃除グッズだよ!! そうだよ!! メイド・オルタに変な道具売りつけてんじやねーよ!! 俺の部屋のトイレ吹っ飛んだらどう落とし前つけてくれる気なんだよ!! こんなもんがあるから!! こんなもん没収だ!! 後でカルデア警察にこさせるからな!!」

「ガッテム!!?」

それは実在するかしないか噂されるカルデアの秩序を守る特殊組織。

その名を出されてはかの天才も叫ぶしかなかった。

彼は今度こそ工房を後にした。

☆

さて、残るは黒い聖女様のちっこい方。

ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイとか長ったらしい名前の女の子を探すだ

け。といつても、居場所は大体把握済みだ。

大それたことを云えば、彼女はすでに袋のねずみ状態だ。

彼のサーヴァントの隠密スキルが役に立ったのだろう。

「あれ？ マシユじゃん、おはよう」

「あ、おはようございませす。英之介先輩」

それは思わぬ出会いだった。

あまり出くわしたくない相手だと言つてもいいだろう。この場合に限るが真面目な彼女と出くわすのは彼もバツが悪いだろうに。

ただし、子供たちそつちのけにしても興味をそそられるものがないと言えば嘘になるだろう。彼女は今朝、マスターである藤丸立夏と共に行動していなかったからだ。いつも、共に行動しているわけでもないが、朝一からどこかへ出掛けたマシユが気になったのは本当だ。

彼女は小さな休憩スペースのベンチに座つて缶コーヒを飲んでいた。

「つーか、お疲れ様？ 立夏に伝言もせず朝早くから何してたんだよ?」

「あー、その事なんですが……」

マシユもバツの悪そうに頭をかいた。

「とりあえず、お隣どうぞ……」

「それじゃ、お邪魔しますか」

小さくて黒い聖女様の追跡は一旦中止して、彼はベンチに腰掛けた。

「あ、何か飲みます?」

「いや、自分で買うさね」

「でしたら、せつかなのでフオウさんを選んでもらいましょう」

「フオウ」

「それ、おかしくね?」

小銭を入れた時には遅かった。

キヤスパリーグが跳んで跳ねて自販機のボタンを押した。

ピッ。

ガコン……

ビタミンがたっぷり入ってそうな150mlのペットボトルが出てきた。きつと、彼にビタミン沢山摂れと暗に告げているのだろう。

「それで?」

「はい?」

「いや、マシユは朝から何してたんだ、って話」

「あの、そのことなのですが……あまり英之介先輩にも話したくない案件と云いますか」

「ズバっと心にきたぜ、今の」

「あ、いえ、英之介先輩に話せば必ず協力してくださいる案件なのですが、そうなると英之介先輩にご負担がさらに押し掛かるといいますか、下手をすれば死者、この場合は英之介先輩が死んでしまいかねないと言いますか……」

「俺死んじゃうの!?!」

だから、マシユは口を濁した。

彼を心配して、彼の身を案じて、たとえ彼がマスターでなくてもマシユは彼を気遣う、  
ことでもある。

「でも、本当に困ってるんだったら俺にできることなら何でも頼れよ?」

「はい、ありがとうございます。では、さつそくなんですが今夜お時間ありますか? 英之介先輩にご迷惑をおかけになると思いますが手伝ってください」

「切り替え早いね、ちみ」

その切り替えの早さに彼も驚くばかりだが。

「詳細は今ココで明かせません。その案件も手伝うというか、まずは相談というべきでしょうか」

「ふむ。人生相談みたいなものか」

「確かに人生を掛けた相談とも言えるでしょう」

「マシユたそと逢瀬……オラわくわくしてきたぞ」

「そういう冗談はほどほどに、この事はくれぐれも先輩や英之介先輩のサーヴァント達に悟られないよう、見つからないようにどこかで落ち合いましよう」

「難易度ちよー高っ」

しかし、困った後輩を見過ごせないのが彼の美德でもある。カンチョー如きに大人気なくなるパイセンではあるが。

2人で密会する場所と時間はまた後でスマホで連絡入れるとのこと。

「あつ、もうこんな時間……」

「フオーウ……」

時刻は午前7時55分。

「……………」

彼は時計を見なかったことにした。

「それじゃ、私は食堂に行きますね。英之介先輩は朝ごはんは食べ終わっただすよね？」

「え、ああ、おお……そうだよ？」

「何故、疑問系なんですか……それじゃ、また後ほどお会いしましょう」

「フオーウ」

彼の返答に呆れながら、マシユはその場を後にした。

「さてと……」

そして、彼も動く。

☆

さて、カンチョーによって始まった聖戦も終わりを迎えようとしていた。

本当にどうでもいい話だが、それでも彼にとつては聖戦と呼ぶに相応しいメモリアル・ウォーになるのだろう、これは……

落とし前はつげなくてはならない。

そして、彼は勝利を確信していた。

彼はのんびりと時計の針を見つめながら、先ほどのベンチから一步も動かず、ドリンを飲んでいた。

「オルたちやーん。そろそろ出てきたらどうだい？　そこにいるんだろー?？」

「……………」

無人の休憩スペースから伸びる廊下の突き当たりにある女子トイレに向かって彼が独り言を言っているようにも見えるヤバイ光景だった。

「オルタちゃん、俺もくだらないことでキレて悪かったよー。反省したよー、だから仲直りをしよーよ。もうカンチョーさせるとか言わないからさー」

「……………」

これっぽっちも心が籠っていない。

それでヒトを騙せると思っているのだろうか、ましてや相手はちいさくて黒くても聖女様だ。

「俺はねー、オルタちゃん。小学校の時にさー、イジメっ子にカンチョーされて、クラスメイトが周りにいてる中で我慢できず洩らしちゃったことがあるんだー。カンチョーって凄いやね。怖いよね。ウンコたれになるわ、臭いわ、イジメられるわ、もう笑っちゃうよねー」

「……………」

彼は勝つために己のプライドさえドブに捨てられる。

「その後、どうなったと思う？ 学校を変え家を引越すまでそのイジメは続きましたとさー。男子からしつこくカンチョーされ続け、女子から避けられ、担任の先生も見ぬ



フリでしたー……ねえ、それ聞いてどう思った？ 俺のことちよつとは可愛そうな奴と  
思った?? 思ったのなら、こっちに来て話そうよ。平和的に解決しようよー」  
「……………」

過去の彼がどうあれ、平和的にと彼が言うだけで不穏な響きにしか聞こえないのは何  
故だろう。

「オルタちゃん、ここで俺と仲直りしてくれないと、一生このままずっとずるずるカン  
チョーのこと引きずってしまふよー。だから、ね？ トイレから出てきて話し合おう。  
今なら俺の膝の上に座らせてあげるからさー」

「ろ、論理的に言ってそんなことで私が出て行くわけないですからねっ!!」

「だけど、オルタ・リリイは反応してしまった。」

「あ、やっぱりそこにいるんだな、オルタちゃん。だったら、俺がそっちに行つてやるよ」  
「あ……………」

「ついに決着がつく。」

彼のサーヴァントが暗躍していたことに気付かなかつた子供たち。カルデアにはあ  
ちこちにサーヴァントの反応があるが、もつとも警戒しなくてはならないのは彼だ。彼  
を警戒するあまり、他のサーヴァント達が盲点になっていたというのもあるのだろう。

「それと、もう一つ。」

情報操作されたということ。

情報を制した者が戦局を制するともいうように、彼はサーヴァントを使い、それっぽい噂をカルデア中に流したのは事実だ。「もう俺は怒つてないよ。仲直りしよう」と逃げ回る子供たちを見かけたら、それとなしに伝えるように指示しておいた。

廊下ですれ違つた食堂を後にした他のサーヴァント達（とりわけ安全な部類の）でも、カルデア職員達にそれとなく伝えておくだけでよかつた。

ドクター・ロマンやダ・ヴィンチと会話していたのも、そのためだ。

あとは噂が噂を呼び、カルデアは広大だが噂のそれは予想以上に拡散され子供たちの耳に届き、子供たちは勝手に疑心暗鬼に陥るだけだ。

子供だから単純に騙せると踏んだのだろうけど。本当に彼は怒っていないのかな、と不安になるだろう。であれば、いつまでも隠れているわけにもいかない。情報を得るために、最終的に事の発端である人物の様子を伺いたくなるものだ。

もう、子供たちは彼の罠にハマっていた。

「やあ、やっと会えたね、オルタちゃん。俺は君に会えて嬉しいよ」

「そんな悪い顔で言っても嬉しくありません、エツチなトナカイ2号さん」

対峙する2人。

子供と大人。

サーヴァントと人間。

そして、彼らはお互いが切り札を用意していた。

「さあ、そこから出てきてお話をしようじゃないか」

「嫌です。信用なりません。私はここから一步も動きませんもんね」

「やれやれ、そんなほつぺたを膨らましてかわいこぶつても駄目だぜ、オルタちゃん。年長者の話は聞くもんだ」

「でしたら、私をここから出してみてください。できますか？ 貴方に」

「……………」

それはお互いを分かつ境界線。

男性禁制、不可侵の領域に立つオルタ・リリイが一步優位に立っていた。

「えっへん。トナカイ2号さんも流石に女子トイレに入ってくる度胸なんてないでしょう」

「……………」

彼はふと、昔のことを思い出した。

小学生の頃、まだイジメがなかった頃、彼が気になる女子にちよつかいをかけ、怒らせて追いかけられ男子トイレに逃げ込んだ時のことを。また、女子が彼にちよつかいをかけ、彼が女子を追い掛け回し女子トイレに逃げられた時の頃を、懐かしく思い出した。

彼はふっ、と笑う。

「さあ！ どうしますかトナカイ2号さん！ このまま耐久勝負と行きますか！ まあ、論理的に言ってしまうえばそうなつては勝負ありです！ 何故なら、私のお尻を狙うエッチなトナカイ2号さんが女子トイレ前で悪い顔してるだなんて、すぐに誰かにバレてカルデア警察に通報されますよ!!」

「……………」

「でも、私も聖女の端くれみたいなものです。今ならまだ許して…………ってなんで入ってきてるんですかー!？」

「いや、話長いし」

今の彼に恐れるものなかれ。

彼は普通に女子トイレに侵入してちっこい聖女様を捕まえ、廊下に引きずり出すのであった。

「そ、そんな、私の完璧な作戦が…………」

「ふっはっはー！ 女子トイレにビビる男子がいてたまるかー！ オルタちゃんといチャイチャヤしたいという気持ち俺が俺に勇気をくれたんだ!! もつと触らせろー!!」

「なななななななー!!」

カルデア警察のおまわりさーん、変態はこつちです。

「さーてフィナーレといこうじゃねーか。そこに隠れてるんだろ？ ジャックちゃんにナーサリーちゃん!! 君たちも俺のされるがままの運命なんだよ、出ておいでー!!」

廊下の角からこっそりこちらを窺っているのは噂に引きつられてやってきた2人。主役は整った。

「あわわ、どうしよう。オルタちゃんが捕まっちゃった」

「お母さんと呼んできた方が……っ!?!」

「もう手遅れだぜー、ジャックちゃん!! もつと周りを見て!! 君たちが助けを呼びに行ったらオルタちゃんがたいへんなことになっちゃうよー!!」

「あはははははっ、こしよこしよはらめれす〜トナカイにござくん／＼」

手始めに、オルタ・リリイはこしよこしよの刑にあった。

「くっ、こうなったら実力行使でオルタちゃんを助けるしかないの……っ!!」

「そうだね。2人で同時にかかれば……っ!!」

「君達、人質の意味分かってる?? ほら、オルタちゃんもつと酷い目にあうぜ〜」

「わひやひやひやひやひやっ、脇もダメなのでしゅ……／＼／＼」

「ぐぬぬぬぬっ……」

サーヴァントである前に2人は子供だ。マスターの指示もなく、この絶望的状况下を突破することはできなかった。



☆

されど、オチは必要だ。

今回も犯罪すれすれの彼の行為に天誅を下す者はやっぱりいた。

「貴様、そこで何をしている……?？」

「……………」

時刻は午前8時を回っていた。

当然、彼のスケジュールはびっしり詰まっていて午前8時から確か朝の稽古だった。その、稽古担当のサーヴァントが冷酷な目で彼を射抜いていた。

メイドではない方の黒い我が王・アルトリア・ペンドラゴン・オルタの登場に場が静まりかえった。

ので、彼は高らかに笑うのをやめて、死んだ目で彼女を見返した。

「朝飯も食べに来ないで、時間通りに道場も来ないで、ナニをしているかと思えば……：：：なにか、言い訳でもあるか?」

「ナニモゴザイマセン」

の、直後に彼に正当な制裁が下された。

ようは腹。パンだ。

「ゴバババー!?!」

「マ、マスター!?!」

「ああ、貴様らも同罪だな、静謐せいひつのハサンに新入りのアサシンよ」

「え、私はマスターのために……っ!?!」

「だ、段蔵も初任務を頑張っただけで……っ!?!」

直後、2人の脳天に拳骨が落ちた。

「きゅ〜」

白目を剥いてノックダウンだ。

「さて、子供たちよ。アタランテやお前たちのマスターが心配していた。早く食堂へ行つてやれ。このバカは私が責任を持ってしごいておこう」

「は、はい」

こうしてカルデアに平和が戻った。

というか、いつもと同じオチで落ち着いただけなのだけど。

まあ、子供たちの逆転勝利ということで聖戦の幕は閉じるのであった。



彼のお仕置きについて話せるなら話をするとしよう

さて、午前8時からはお仕置きの時間だ。

いや、なに、稽古に使う時間帯だったはずなのだが、犯罪一歩手前まで粗相した彼には罰が必要な訳であって……

場所は道場。

自称・天才のサーヴァントによって設けられた一施設に彼はいた。

我が黒い王の逆鱗に触れお仕置きを実行していた。

足ツボに効くぶつぶつのマットを敷いた上に正座をし、米袋5袋分の重さを軽く越えている重りを膝の上に乗せながら、熱いお茶が淹れてある湯飲みを頭の上に乗せた、なんとマヌケな刑が執行されていた。

そんな話になるはずだったんだ。

「こ、子イヌ……アタシ、もうだめ……かも」

「……………」

「トカゲのセイバー、私語は厳禁です、よ!!」セイバーツ

「ふぎやー!?!」

30分後の話……

彼のお仕置きのはずなのだが……他の者が犠牲となった。もう少し噛み砕いて詳細を伝えれば、彼はお仕置きに耐えて、彼のサーヴァントが犠牲となったのだ。

「あ、足が、し、痺れて、子イヌうく……」

「……………」

奴の名はエリザベート・バードリー。

クラスはセイバー。

反英雄ながら勇者気取りのサーヴァントが彼に助けを求めるも、今回は綺麗にスルーされ、本日の稽古内容に耐えられず罰を受けた、ということである。

「今、マスターは新境地に入ってるんです。話しかけないでやってください。それと、ここが痺れるんですか？ え？ ここですか?? ここがそんなにいいんですかー!!」セイバーツ

「の〃おおおおおーっ!?!」

本日の朝の稽古は、彼の罰も合わせて1時間に及ぶ瞑想——セイバーが集う道場でセイバーによるセイバーと彼のためだけの瞑想——用はセイバー同士の我慢比べみたいなものである。

もちろんサーヴァント達は罰を受けた訳ではないので普通に正座のみ。

ただし、それすらもできなければ、あのポンコツ勇者のように監視役の謎のヒロインXである我が王にメーンされるのであった。

「ほらほらー、ちゃんと姿勢を正して新境地を開いて、くだセイバー!!」  
「に」ゆやああああああつ!？」

セイバーいじめを楽しむ我が王はさて置いて。

ここ道場には彼の朝の稽古を聞きつけてやってきたサーヴァントは数多いたりする。ポンコツ勇者然り、今この場にいるのはクラス・セイバーがほとんどで……半分は冷やかしだったり、彼と共に心身を鍛えるためだったり、少しでも彼と接触するために欲望に忠実だったり、古今東西様々なサーヴァントが入り浸っているのが今の現状だ。

本来、朝の稽古担当であった黒い方の我が王・アルトリア・ペンドラゴン・オルタであったが、日に日に道場に顔出すサーヴァントが多くなり、無秩序に彼に接触を試みるサーヴァントを危惧した黒い方の我が王は、なげなしに謎のヒロインXである我が王を監視役に抜擢した、というちゃんとした理由があった。

「雑念のあるセイバーはこうです!! えいやー!!」セイバーツ

「子イヌウ〜……っ!!」

「……………」

新境地に入っている彼の耳には届かない。

彼に助けを求め手を伸ばすも、それすらも手痛く竹刀で叩かれるのであった。

「流石です、マスター。段蔵も見習わなくては……っ!!」

「あつ、今誰か喋ったわよっ!!? 段蔵って言うてなかった!?!」

「……………」

……………。それはたぶん気のせいだろう。

「はん、私には聞こえませんでしたね! 空耳なんじゃないですか!」セイバーツ

「ほわぎや——!?」

「……………」

ポンコツ勇者の発言は却下された。

「しかし、アレでまったく動じないなんて、英之介さんってホント何者なんでしょうね

?」

「儂が惚れこんだ男じゃ、アレぐらいは平然とやってもらわんとな!」

「はあ、英之介さんとゲームしたい……」

「しっ、奴に聞こえるよ。集中集中……」

「やっぱり誰か喋ってるわよ……っ!!」

「……………」

新撰組隊長と第六天魔王、それとインフェルノなんたらに剣豪武蔵。彼や藤丸立夏に

召喚された日本のサーヴァント達だ。2人、クラスがアーチャーが紛れ込んでいるが、気にしなくてもいいサーヴァントだろう。

ポンコツ勇者に標的が向かってる間はいつもこそそと、喋っていた。

「な、なんのこれしき、英之介とふんずれもつれ……じゃなかった。手合わせをするためだ……ぐぬぬっ」

「あつ、やっぱり今聞こえたわ!! 私のライバルが打算してるわ!!」

「何をワケの分からぬことを言ってるんですか。マスターには指一本触れさせません。勿論、貴女もですよ、このポンコツ・セイバー!!」

「ア、アタシがポンコツ・セイバーですってー!?」

「……………」

ポンコツ勇者が抗議をしようと立ち上がろうとするも、足が痺れて生まれたての小鹿のように脚を震わせるだけ。

そこを狙われ、横殴りの竹刀に払われ、見事ポンコツ勇者はこけた。

「正座、まさに悪い文明……」

「ほらっ。ほらっ!! 今のも聞いたでしょっ!! 正座は悪い文明だつて……っ!!」

「そんなワケないでしょうに!! 正座は良き文明です!!」セイバーツ

「……………」

コケながらも匈奴<sup>フンヌ</sup>の末裔に指差すポンコツ勇者、エリザベート・バードリー。ついでに、ローマ五第皇帝にも指を差してやった。

監督役の我が王は「ふーやれやれ」と言った感じで2人に訊ねた。

「貴女たち、喋りましたか？ そんなはずないですよねー??」

「……………」

……………。

「ポンコツ・セイバー!! 彼女らは喋ってないですって!!」

「だからポンコツ言うなー!! それに私は喋りましたってバカ正直に答えるわけないでしょー!!」

「……………」

もう、あれだ。

この2人を道場から追い出したら万事解決する気がする。

ポンコツ勇者は納得がいかない様子で、皇帝様の傍まで這いよって、そのモチモチした頬をぶにぶにした。

「よ、余は喋ってなどおらぬ…………ツ!!」

「今喋ったじゃん!?!」

しかし、今のはノーカンド。

「貴女がほつぺたをつつかなかったら彼女も声を発さなかつたんですよ!! このウルトラ・ポンコツ・セイバー!!」

「ウルトラ〜ッ!? ウルトラって何よ!! アタシはそこまでポンコツじゃないわよ!!」

「あ、今墓穴掘りましたね! そこまでポンコツじゃないってことは、言い換えればちよこつとはポンコツだと認めた証拠ですよ、それは!!」

「う、うううううるさーい!! ポンコツポンコツ言うなー!!」

「……………」

なにやら物々しい雰囲気となってきた。完全にポンコツ勇者は瞑想する気は無しだ  
……………

「もう怒ったわ……………」

「ほほーう、じゃあどうしますか?」

ポンコツ勇者、ついにキレる。

「うわー、あやつ、どこからともなく竹刀を取り出したぞ沖田。なんと愚かな」

「ホント愚かですねー。あんな小鹿のように震えた足で謎のヒロインXさんを倒せる訳ないじゃないですかー」

「左様。しかしじゃ、今この場かりはアレよのう。特殊な陣形というか、正座をした農ら障害物をどう上手く利用するかが勝負の決め手じゃな」

「あ、それゲームみたいで面白そうですね」

「そうじゃろ、そうじゃろう」

うん、もう普通にお喋りしているサーヴァントもいるね。

そんな彼らのことなどアウトオブ眼中な謎のヒロインな我が王とポンコツ勇者が衝突した。2人のサーヴァントが安全を考慮して手に持つ竹刀同士がぶつかり始めた。

というか、いろいろおかしいよね。バトルが勃発し出したけど、瞑想中の他のサーヴァント達は微動だにせず正座のままだ。まして刑を執行中の彼もまた、微動だにせず新境地へ入ったままであった。

我が黒い王も山の如し動く気配すらない。素晴らしい。

「サーサー、本日もやってまいりました。ポンコツ勇者VS謎の監督役Xのどうでもい  
い不毛な争いは、この儂こと第六天魔王・織田信長が実況を勤めさせていただくのじゃ  
！」

「ぐたぐた感ハンパないですが、瞑想中の暇つぶしにはちょうどいいですからねー。あ、  
じゃあ、私こと沖田さんが解説役って訳ですかー。でもノツブ、これ解説してる暇ない  
んじやないですかー？ ほら、平然と罰を受けて可憐にもスルーし続けていた英之介さ  
んがとうとう余波で吹き飛びましたよ??」

「マスター!?!」



「おおっとー、暴走するサーヴァント達がマスターの近くでぶつかり合っていたこともあり、流石のマスターもそれに耐え切れず吹っ飛んでしまったー!! しかし、流石は僕のマスターじゃ!! 人望のあるマスターは壁に激突する手前で加藤段蔵に抱きかかえられ着地し、そして何事もなかったかのように瞑想を再開したじゃとー!!!」

「あ、オルタさんが足ツボマッサージに、先ほどの5倍はありそうな重りに、熱いお湯が淹れてあるポットを用意してますね。まだお仕置きを続ける気なんでしょうけど……というか、英之介さんの悪運つてメータ振り切ってますねー。まあその分、サーヴァントを召喚する際、女性サーヴァントしか出ないんでしょうけど」

「というか、君達はよくもまあこんな状況で暢気に実況なんてできるよね……」

剣豪武蔵は呆れ顔で言った。というか、語り手である私はもういらぬ感じかな??  
ぐだぐだな2人に仕事奪われた気分だ。

「さて、ポンコツ勇者の足の痺れが取れてきたのか、立ち回りが良くなってきたのじゃ。流石は勇者でアイドルを自称しているだけのことはあるのう。ダンスで培ったきたセンスでこの障害物をくるりとターンし、可憐に優雅に难道おどれらは儂を挟んで打ち合つとるんじゃー!!!」

「ぶぷーっ、良い気味ですノッブ。でも、アーチャーであるノッブなら謎の監督役Xさんに制裁受けることないでしょうに」

「あつ、ホントじゃ！　こんなに喋つてもセイバーされてない？　アーチャー鼻屑さ  
れてこんなに嬉しい日がくるとわ是非も無いよねっ!!」

もう勝手にやっつてればいいと思う。

さて、彼らのぐだぐだ実況はこの辺にしといて、最後にこんな騒がしさにも関わらず  
目を閉じ美しくも凜と佇む2人の我が王の様子を窺つてみることにしよう。

青の王と黒の王

同じ顔をして別の側面を持つ彼ら。

の、お腹が鳴っていた。

「……………」

ぐぎゆるゝってね。

## 彼よりも我が王の話をするでしょう

午前9時を回った。

「サンタさん、本当に大丈夫なの？」

「私たちが突然おしかけたらお母さん達もビックリしちゃうよ」

「いいえ、ロジカルに言っただけ問題ありません！ 今ノリにノっている私を誰だと思っ  
ているんですか？」

「ジャンヌ・スパム・ダルク・スパム・オルタ・スパム・サンタ・スパム・リリイだっけ  
？」

「ち・が・い・ま・す!!」

子供たちは朝から元気がいいね。

ナーサリ・ライムにジャック・ザ・リッパー、そして、2人の先頭に立って歩いてい  
るのはジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイ・スパム……だっけ？

とにかく、朝ごはん時に彼と鬼ごっこをしていた子供達が管制室へと向かっていた。

「トナカイ2号さんには先ほどの借りを返してもらわなければなりません。それに、  
ナーサリさんの葉の件もまだ片付いていませんので」

「そうだった。私の大切なしおり、人質に取られたまんまだった。返してほしいの」  
「じゃあ、お兄ちゃんを解体しに行こう」

廊下を歩く子供たち。

解体はともかく、これより9時半から始まる任務に連れて行ってもらうために、管制室に乗り込む気だ。理由は皆まで言わなくてもわかるだろうけど、カルデアでお留守番するのは子供たちにとっても退屈極まりないもの。レイシフトして素材やら種火やら、彼に悪戯する方が何倍も有意義な時間を過ごせるといふものだ。

もちろん、ナーサリ・ライムのしおりの件も大事だ。

だから、今朝の件を蒸し返してでも自分達を連れて行ってもらえるように、ブリーディング中の彼らの元へと向かった。

「ちよつと待ったー!!」

しかし、子供たちの前に立ちはだかる者が現れた。

「おやおや、これはこれはお嬢さん達、おそろいで。朝から元気がいいですね〜」

「そういうルビーも、元気ありすぎるけどね。まあそれは置いといて」

「相変わらずイリヤさんは手厳しいですね〜」

「はい、そこー。関係ない話しない」

弁慶が立ちはだかったわけでもない。魔法少女2人組みが立ちはだかっただけで

あった。おまけに、魔法のステッキもようやく目が覚めたんだね。

「むっ、なんですか？ クロエさんに、イリヤさん。おまけに、ルビーさんとサファイアさんまで。貴女達、さては私たちの邪魔をしに来たんですか？ 私達に今回のレイシフトを諦めろと?」

「そ、そんな……っ!?!」

「か、解体するよ……っ!?!」

カルデアにおける特異点にレイシフトするサーヴァントの上限問題。

女性ばかりだが増え続けるカルデアのサーヴァント達は、少なからず活躍する機会が減るものだ。レイシフト先で一番の花形は7つの特異点のどれかだろう。突拍子もなく突然沸き起こるぐだぐだな特異点やら素材やら種火集めのために現れた特異点など。二の次で、しかし、彼らは少しでも活躍しようと、マスターのために命を燃やそうと、目立ちたいからという理由であったりもするが、自我が強いサーヴァントが多いせいとか、お互いが譲り合うことができず、話し合いで解決できずに衝突することも、しばしあったりする。

が、しかし、どうやら今回は違ったようだ。私やサンタたちの思い過ごしであった。「違うわよ！ 周回行きたいんですよ？ だったら人手が多いことに越したことがないわ」

「私たちも最近レイシフト連れて行ってもらえてなかったから抗議しに行く所だったの。でも、マスターさん達がオツケーしてくれるのって本当に気分次第だから味方は多い方がいいよね、ってクロエと話してたの」

「まあ、アレですよ。子供5人で駄々をこねれば周回程度なら連れていってもらえるかも、って算段ですよ」

「姉さん、それは別に言わなくていいんじゃないや……」

何はともあれ。

てられてっつてっくん。2人の魔法少女と2本の魔法ステッキが仲間に加わった。

「ロジカルにいつて、とても心強いです！ 皆さんで必ず成功させましょう！」

「名づけて『5人いればマスターもイチコロ！ おねだり駄々コネまくり作戦』よ!!」

最早、怖いものなんて子供たちになかった。

勝算があった。

最強の切り札は自分たちだ、という絶対的な自信が子供たちにあった。

自然と駆け足になった。

目的地は目の前だった。

「トナカイさんにトナカイ2号さん!! ロジカル的に私たちを周回に連れてっつてくだ

さい!!」

だが、結論から言つて、子供たちの願ひは今回は叶うことはなかった。

目の前にある光景に、目を疑い、そして、子供ながらに現実つてやつを受け入れることになつた。悟つたと言つてもいい。空気を讀んだと言つても過言じゃない。

「マスター、てめえふざけんじゃねーぞ!! 父上を周回に連れて行きやがれー!!」

「ぎゃーっ!!? モーさん、ギブギブツ!!」

「あの一、2人とも……ブリーフィング続けていいかな?」

恒例のブリーフィングは見ての通り進んでいなかった。子供たちの気も知らないで、彼らはホントいつも賑やかだった。

「今日こそ父上を周回に連れて行けよ!! この前、約束しただろ!!」

「いや、ちゃんと連れて行つてるじゃん!! オルタ達をさ!!」

「その父上じゃねーんだよマスター!!」

「じゃあ乳上のことかー!!」

「それでもねー!!」

「だったら謎のヒロインXの父上かー!!」

「ちげー!! オレが言つてる父上は青い方の父上だー!!」

「それは立夏に言えやー!! あつちのアルトリアのマスターは立夏だ!!」

「いや知つてるし!! だーかーら、立夏に強く当たれねーからマスターにキレてんだ

ろー!!」

「それおかしくね……っ?」

マスターである彼の胸倉を掴みぐわんぐわん揺さぶる、ブチギレモードのモードレッツト卿の姿に子供たちがドン引きして、管制室に入ることすらできなかった。

ついに、サーヴァントにコブラツイストされる彼。

「つーか、なんでマスターはデコに矢が刺さってるんだよ。ふざけてんのか……っ!!」

「いてて、引つ張るな!! これには海より深いワケが……って、だから無理に引き抜こうとするな!! この矢は呪いの矢よりも恐ろしい矢なんだぞ!!」

ブリーフィングより少し前に、どこぞの通りすがりのアタランテに天誅されたらしい。本物じゃなく吸盤が付いたオモチャの矢で射抜かれて、しかし、サーヴァントの腕力でも取れないときた。

まさか、自称・天才サーヴァントが開発した超強力な接着剤の力が付加されていることなど知らず、無理やり引き抜こうとすれば、もうそれは想像するに恐ろしいことになりそうだ。

当の本人は、ブリーフィングに顔を出しているが、笑わないように必死に笑いを堪えていたりする。

「どうでもいいけどよ、青い父上を周回に連れて行きやがれー!!」



「ぎゃー!?!? 矢が……………取れたー!!?!」

「あれ? おかしいな、接着力が弱かったのかな?」

「てめえ、ダ・ヴィンチちゃんも一枚からんでたんかい!!?」

「英之介さん、血がオデコからドバーっっておもしろいことになってますよ」

もう、勝手にやっってください。そう子供たちの顔に書いていた。

「あれ、どうしたのみんな?」

「あ、いえ、お邪魔しました」

「……おじやました……」

欠伸をしていた藤丸立夏がこちらに気付いたが、もうここには用はないと、回れ右して駆け足で去っていく子供たちであった。

☆

さて、本題。

青い方の我が王の話をするでしょう。

モードレット卿があんなにも青い父上押しをする、アルトリア・ペンドラゴンという少女のお話だ。

かの有名な誉れ高きアーサー王。

しかし、カルデアではそんな王の存在さえ、影の薄いサーヴァントとして不毛に扱われる厳しい場所であった。

モードレット卿はそれを危惧していたのかもしれない。

いや、単にファザコンなだけだ。

「そもそも……そもそもだ、マスター。青い父上つてカルデアに来てから活躍したことあるのか？」

「立夏、あつたつけ……?？」

「え、あつたと思うけど……たぶん、ありました」  
「ここではつきりさせよう。」

私は彼らの活躍を初めから見えていたけど、青い方の我が王は大して活躍してなかった。

「フランスではどうだったんだよ、マスター？」

「立夏、どうだったんだ？」

「英之介さんよこのオルタずに全部おいしいとこ持っていかれましてー」

そういうえば、オルレアン城攻略は2人の黒い方の我が王の特攻によって壊滅したんだっただけ？

それで、崩れて埋もれた這い出てきた黒い聖女様と目ん玉が飛び出た黒幕キャスターをフルぼっこにしたんだっけ??

それで、その時、青い王はというと後方でワイバーンとちまちま戦っていただけだった……

「さ、流星はオレの父上だな。決戦でマスター達を城へ導いたってわけだ」

「ポジティブだな、モーさん」

「うるせーよ、マスター。他にもあるだろ? ローマはどうだったんだよ?」

オルレアン攻略の後、新たに召喚したサーヴァントはフランスで出会ったサーヴァント達が主だった。だから、藤丸立夏もフランス組である白い聖女様やマリー・アントワネット王妃の運用をしたくて、それで我が王も後方支援に回ってくれた。

そして、彼に召喚された新人なジャンヌ・ダルク・オルタの独壇場だったような気がする。

「お、王とは本陣にどっしり構えて兵を動かすもんだよな。流星は父上だぜ」

「モーさん、顔ひきつってるぜ」

「うるせー！ 次だ！！ 第三特異点だったオケアノスはどうかだっただよ！！ 青い父上も何かしら活躍したにちがいない！！ そうであってくれ！！」

ところがどっこい。もうカルデアのお留守番組になっていた。

「お、お留守番だ、と……もう、その時期から?？」

「ネロ達ローマ組みの試運転もあったし、敵がカルデアに襲撃してきた時の場合に備えて仕方がなかったのよ」

「それも重要な任務だと思えますよ、モードレットさん」

「そ、そうだよな。じゃあ、ロンドンは……」

「モーさんが一番知ってるよな」

ロンドンは、まあ……いなかったことはモードレット卿も知っている。

否定したいが事実だ。否、もしかしたら霧のせいで姿が見えなかっただけでも？ とか考えちゃ駄目だ。それだと王としてあまりに影が薄すぎる。モードレット卿は脳裏に思い浮かぶも否定せざるを得なかった。

もう答えは出ていた。青い方の我が王はまたカルデアでお留守番をしていたのだ。

「それに、アメリカは……」

……。

「ちくしょう……っ!!」

「モーさん……っ!!」

モードレット卿はアメリカで起きた事件を思い出し、管制室を後にした。

☆

ちなみに、ブリーフィングはいつも通り不毛に終わった。ドクター・ロマンは泣いていた。